

# 人間への信頼とソーシャル・キャピタル — 東京都品川区の地域ネットワーク調査から考える —

草野 篤子・瀧口 眞央

## 1. はじめに

ルソーは『人間不平等起源論』の中で、ソーシャル・キャピタルの概念とも言うべき記述をしている。「もしも自分の生まれる場所を選ばなかったとしたら、わたしは人間の能力の範囲に限られた、すなわち立派に統治される可能性によって限られた大きさの社会、そして各人がその仕事を十分に行え、だれも自分が負わされた職務を他の人々にまかせる必要のないような社会を選んだでしょう。つまりそのような国家ならば、すべての個人が互に知り合いなのですから、悪徳がひそかに行われたり、美德が目立たないというようなことは、公衆の視線と判断の前では起こりえないし、そしてこのお互いが会ったり知ったりするということこちよい習慣によって、祖国愛は、土地に対する愛というより、むしろ市民に対する愛となるのであります」(ルソー 小林善彦訳 2005) この書物は 1755 年に公刊されたが、明治期の自由民権派の人々は夜学会でもテキストに使っていたという。

ソーシャル・キャピタルの研究が世界で注目されるようになったのは、アメリカの政治学者 Robert D Putnam の 2 冊の著書に依拠している。1993 年に発行された Making Democracy Work (邦題: 哲学する民主主義) と 2000 年に発行された Bowling Alone (邦題: 孤独なボウリング) である。パットナムは、市民参加とソーシャル・キャピタルにおける変化に関心を寄せている。

ソーシャル・キャピタルに関連した調査には、世界銀行の諸機関が共同で貧困撲滅の形成を目的

とした調査、および OECD の加盟国間の国際比較を視野に入れたソーシャル・キャピタル指標開発のための調査がある。日本では内閣府が市民活動を中心とするソーシャル・キャピタル活動の醸成を目的として 2003 年、2006 年、2008 年に調査を手がけている(内閣府 2003, 2006, 2008)。一方、自治体でも本調査と同様の手法で、内閣府の調査研究と重ねて、質問紙法による自治体の現状把握のための調査分析がおこなわれている(さいたま市 2007)。

ソーシャル・キャピタルは社会資本、社会関係資本と訳されることが多い。また、日本のソーシャル・キャピタルの研究の中心的役割を担っている稲葉はソーシャル・キャピタルの構成要素を次のように定義している。「『社会における信頼・規範・ネットワーク』を含んでおり、平たく言えば、信頼、『情けは人のためならず』、『持ちつ持たれつ』、『お互い様』といった 修正の規範、そして人やグループの間の絆」を、意味している(稲葉 2005)。これに『心の外部性』を加えて、『心の外部性を伴った信頼・規範・ネットワーク』と定義している(稲葉陽二 2008)。稲葉は心の外部性について解説しているが、市場の取引に反映されることがない、個人や企業の社会的文脈で成立し、人々の心に働きかけて、人々が任せて始めて意味を持つという。また、人は、類似した人を求めてネットワークをつくる習性があり、信頼感を増幅させ、波及効果を高める要素をソーシャル・キャピタルは内包していると指摘している。

目的としては、地域の小学校が地域のネットワーク作り、地域を統合する存在になりうると位置づけ、教育、コミュニティのソーシャル・キャピタ

ルの醸成に注目することによって、調査結果の分析から、ネットワーク作りの指標となるソーシャル・キャピタルについて明らかにしようと、継続研究をしてきた。白梅学園大学教育福祉研究センター研究年報 13 号（草野・瀧口他 2008）は、小平市のソーシャル・キャピタルについて考察し、白梅学園大学・短期大学紀要 45 号（草野・瀧口 2009）では、「人間への信頼とソーシャル・キャピタル」の関係について分析し、報告をした。白梅学園大学教育福祉研究センター研究年報 14 号で東京都品川区と内閣府の全国調査との比較を行っている。

本稿は、品川区の他人への一般的信頼とのクロス集計結果を用いて、人間への信頼に対するソーシャル・キャピタルの指標を明らかにしようとするものである。内閣府の全国調査（内閣府 2003）を参考にして、一般的信頼を 10 段階で回答を得たが、「信頼する(1~4 段階)」「両者の中間 5」「注意する 6~9 段階)」に分類しなおし、「信頼する」グループと「注意する」グループの主に 2 つで比較した。

## 2. 調査の概要

調査対象：品川区の小学校の保護者に調査を依頼した。対象の小学校は、品川区が教育に力を注いでいる小学校で保護者に人気が高い 2 校である。調査票は小平市で実施したのと同じ調査票を使用した。

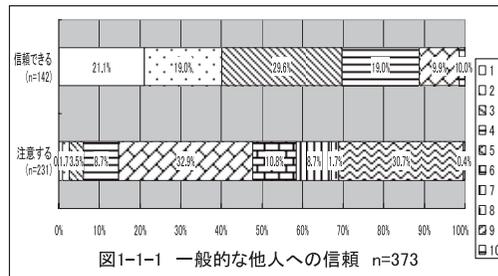
調査実施期間：2008 年 6 月から 2008 年 7 月

調査方法（配布と回収）：配布数は 1209 票、回収数は 587 票で回収率は、48.6%であった。教育委員会に依頼し、教育委員会を通じて小学校 2 校に配布し、回収は小学校に依頼した。

統計処理：SPSS 統計パッケージを使用。クロス集計は EXCEL 2003 で行ない、2 群間の独立性を検証するために、比率の差を検討するカイ 2 乗検定を PASW statistic 18 を使用しておこなった。

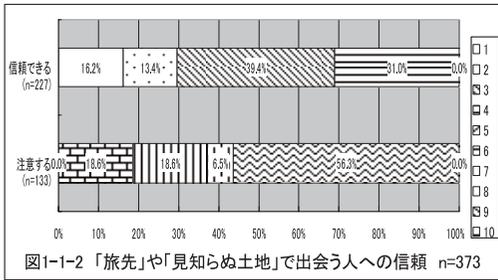
## 3. 結果と考察

### 1. 他人への信頼度



内閣府の調査（内閣府 2003）を参考にして、一般的に人を信頼できると思うか、それともできないと思うかについて、以下のように分類する。「1」をほとんどの人は信頼できる、「9」を注意することに越したことはないとし、その中間を「5」としたとき「1」から「9」の 9 段階に分けて、「一般的」に人を信頼するか注意するかを表している（なお「10」はわからないと答えた者である）。単純集計結果は、「信頼できる」227 人（38.7%）、「中間」216 人（36.8%）、「注意する」133 人（22.7%）、「分からない」6 人（1.0%）、無回答 5 人（0.9%）であった。内閣府調査に基づいて、「他人を信頼できる」（1-4 の段階）人と「注意する」（6-9 の段階）人に分けて比較してみると、一般的な他人への信頼の度合いにおいて大きな差が出た。前者のうち 98.6%の人が「1」から「5」の信頼度を示しているのに対し、後者では 47.7%と半数を切っている。「他人を信頼できる」という人は、一般的な他人への信頼度も高く、「他人に対し注意する」という人は、一般的な他人への信頼度も低いことがいえる（ $\chi^2$  値=331.25,  $p<0.001$ ）。

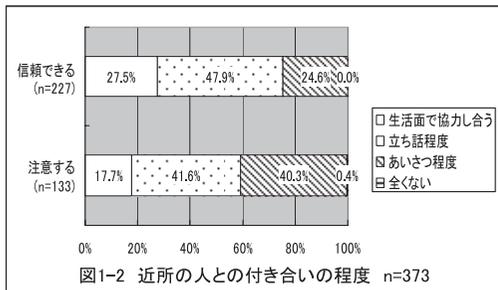
「旅先」や「見知らぬ土地」で出会う人への信頼に関しては、「信頼できる」人と「注意する」人との間において全く異なった結果が出た。前者は「旅先」や「見知らぬ土地」で出会う人に対しても信頼することができ、後者は信頼できないと考えている。普段の他人への信頼の度合いが、「旅先」や「見知らぬ土地」へ行くとより顕著に



なることがわかる ( $\chi^2$  値=338.65,  $p<0.001$ )。

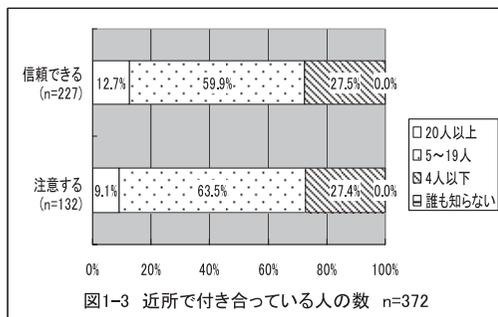
## 2. 日常的なつきあい

### (1) 近所の人との日常的な付き合いの程度



近所の人との付き合いの程度は、「信頼できる」人の方がより「生活面で協力し合う」との回答が高く、「注意する」人の方がより「あいさつ程度」の項目が高くなった。他人を信頼できる人ほど、人との関わりの幅を、生活面というプライベートな空間まで許容していると言える ( $\chi^2$  値=24.338,  $p<0.001$ )。

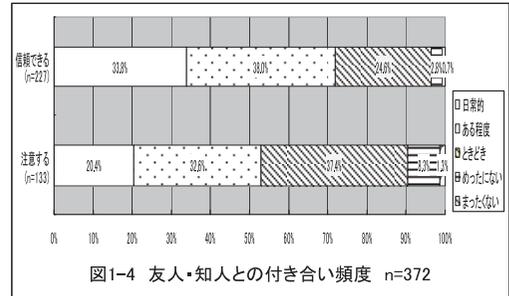
### (2) 近所で付き合っている人の数



近所で付き合っている人の数には、あまり大きな差は見られず、「信頼できる」人・「注意する」人共に60%前後の人が「5~19人」と答えている。なお、「信頼できる」人の方が、近所で付き合

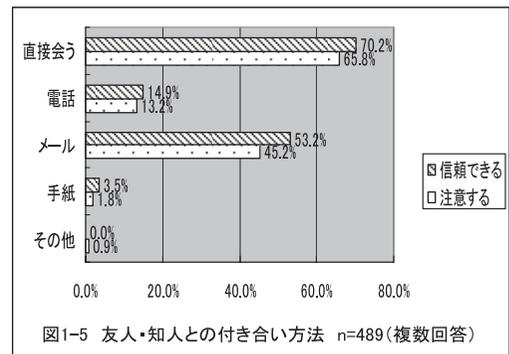
ている人が「20人以上」と答えている割合が多かった ( $\chi^2$  値=501.97,  $p<0.001$ )。

### (3) 友人・知人との付き合いの頻度



友人・知人との付き合いの頻度については、「信頼できる」人・「注意する」人の間に差が見られた。「信頼できる」人の方が「日常的」と回答した者が多く、「注意する」人の方が「ときどき」「めったにない」の項目が高かった。他人に対して「注意する」人は、普段の友人・知人との付き合いの頻度が、「信頼できる」人に比べ低くなっている ( $\chi^2$  値=82.18,  $p<0.05$ )。

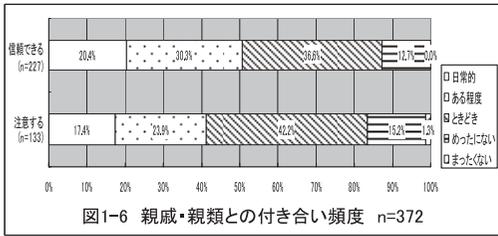
### (4) 友人・知人との付き合いの方法



友人・知人との付き合いの方法については、「信頼できる」・「注意する」人共に「直接会う」が最も多く、次いで「メール」が多かった。それぞれ5%程度の違いが見られた (複数回答)。

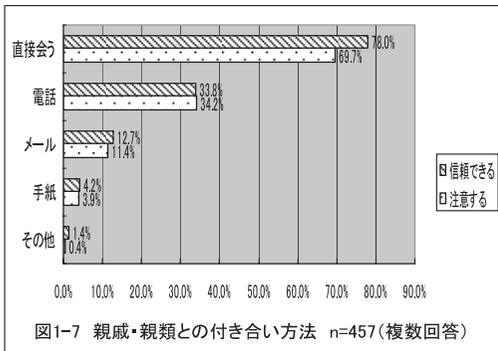
### (5) 親戚・親類との付き合いの頻度

親戚・親類との付き合いの頻度に関しては、「信頼できる」人の方が「日常的」「ある程度」に回答している者が多かった。また逆に、「注意す



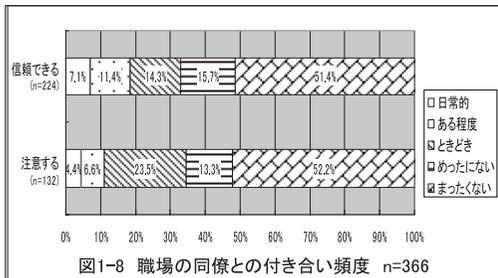
る」人の方が「ときどき」「めったにない」「まったくくない」と回答している者が多かった ( $\chi^2$  値=32.45,  $p<0.05$ )。

### (6) 親戚・親類との付き合いの方法



親戚・親類との付き合い方法については、「信頼できる」人の方が「直接会う」と回答した割合が多かった。しかし、その他は「信頼できる」人・「注意する」人共に同傾向の結果となった(複数回答)。

### (7) 職場の同僚との付き合いの頻度

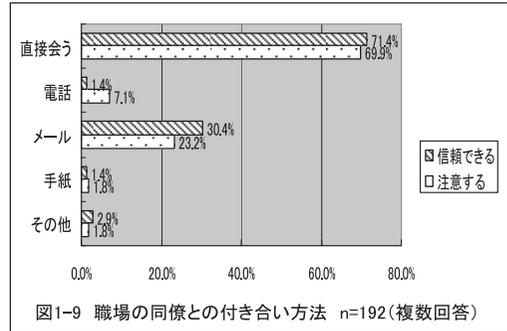


職場の同僚との付き合いの頻度に関しては、友人・知人や親戚・親類との付き合いの頻度とは大きく異なる結果となった。

「信頼できる」人・「注意する」人共に、職場の同僚との付き合いが「まったくくない」と回答し

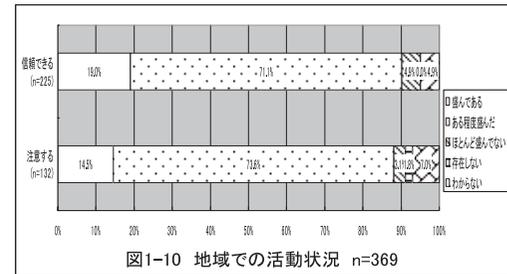
た者が半数を超えていた。「信頼できる」人の方が、職場の同僚との付き合いが「日常的」「ある程度」と回答した割合が「注意する」人より多かった ( $\chi^2$  値=42.88,  $p<0.01$ )。

### (8) 職場の同僚との付き合いの方法



職場の同僚との付き合いの方法については、「信頼できる」人・「注意する」人共に同傾向の結果となった。やはり「直接会う」という回答が最も多く、次いで「メール」が多かった。また、「電話」については「注意する」人の方が割合が多かった(複数回答)。

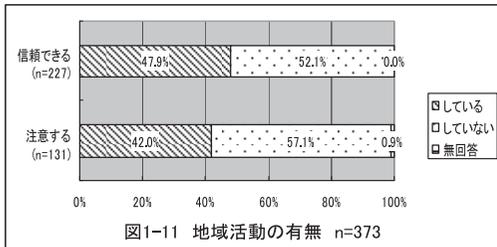
### (9) 地域での活動状況



地域での活動状況については、「信頼できる」人・「注意する」人にあまり差が見られなかった。しかし、注意する人の方が「わからない」と回答している割合が多かった。「信頼できる」人の方が、地域への活動参加への意識が高いことを表しているのであろうか ( $\chi^2$  値=34.72,  $p<0.05$ )。

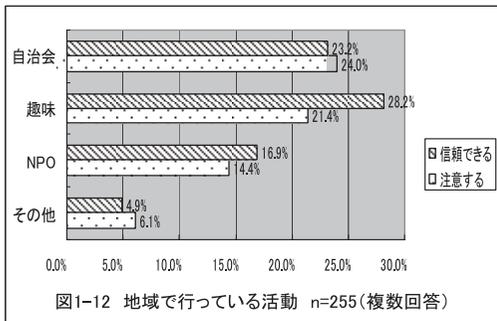
### (10) 地域活動の有無

地域活動の有無については、「信頼できる」人の方が「している」と回答した割合が多かった



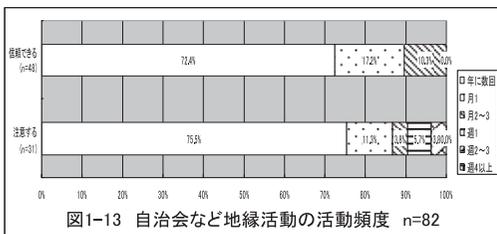
( $\chi^2$  値=29.89, p<0.001)。

(11) 地域で行っている活動



地域で行っている活動については、両者共に「趣味」と「自治会」活動が多いが、「信頼できる」人は「趣味」がまた「注意する」人は「自治会」活動が最も多かった（複数回答）。

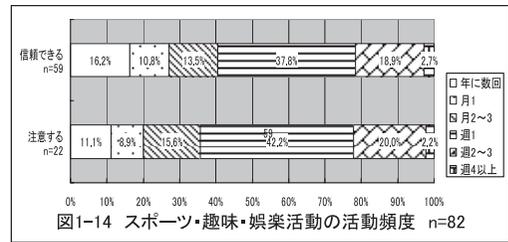
(12) 自治会など地縁活動の活動頻度



自治会など地縁活動の活動頻度については、「信頼できる」人・「注意する」人ともあまり差は見られなかった。しかし、「注意する」人の方が「週に1度」「週に2・3度」という回答が多く、「信頼できる」人の方が活動頻度が少ないということがわかる ( $\chi^2$  値=75.76, p<0.001)。

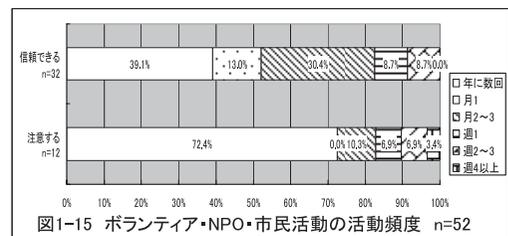
(13) スポーツ・趣味・娯楽活動の活動頻度

趣味の活動頻度については、両者共に同傾向を示しているが、人を「信頼できる」と答えた人よ



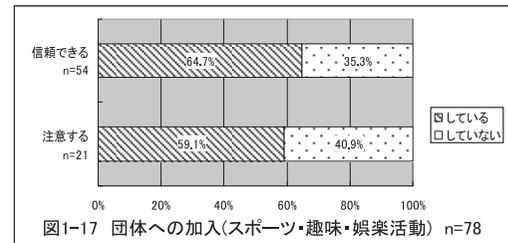
り人に対して「注意する」人の方が「月に2～3回」、「週1回」参加する割合が高くなっていることがわかる ( $\chi^2$  値=44.06, p<0.05)。

(14) ボランティア・NPO・市民活動の頻度



NPOの活動については、「年に数回」「月に1回」「月に2～3回」参加するという割合において大きな差が見られた。「信頼できる」と回答した者は、「月に1回」、「月に2～3回」が「注意する」と回答した人より多かった。一方、「注意する」と答えた人の方が「年に数回参加する」と答えた人が多かった。 ( $\chi^2$  値=112.65, p<0.001)。

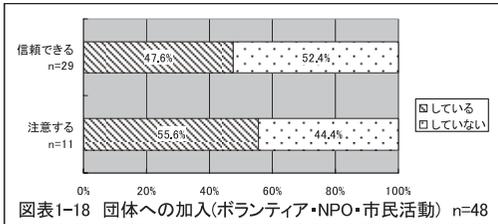
(16) スポーツ・趣味・娯楽活動での団体への加入



スポーツ・趣味・娯楽活動における団体への加入は、「信頼できる」と答えた人の方が多く加入していることがわかる ( $\chi^2$  値=28.70 p<0.01)。

(17) ボランティア・NPO・市民活動での団体への加入

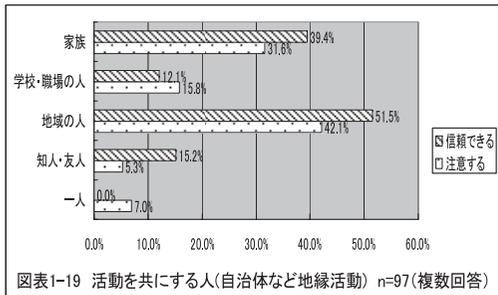
ボランティア・NPO・市民活動における団体



への加入は、地縁的活動やスポーツ・趣味・娯楽活動における団体への加入のデータとは異なる結果となった。

「信頼できる」と答えた人よりも「注意する」と答えた人の方が活動団体への加入割合が多いことがわかる（有意差なし）。

### (18) 自治会など地縁的活動を共にする人



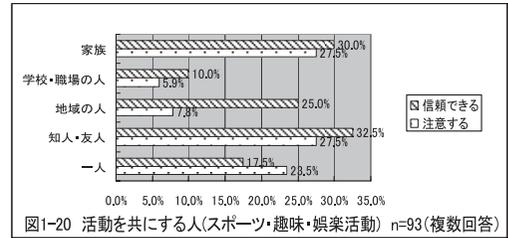
自治会などの地縁活動を共にする人の調査では、「信頼できる」・「注意する」と答えた人の両者とも「地域の人」という回答が一番多かった。「信頼できる」と答えた人に関しては実に半数が該当した。両者とも次いで多かったのは「家族」という回答である。

また、「信頼できる」と答えた人に「一人で参加する」と回答した人はいなかった。このことから、自治会などの地縁活動については、自分に身近な人と共に参加する傾向があることがわかる（複数回答）。

### (19) スポーツ・趣味・娯楽活動を共にする人

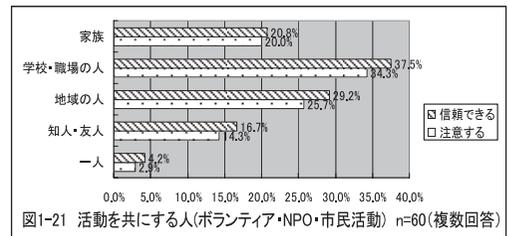
スポーツ・趣味・娯楽活動を共にする人については、「信頼できる」・「注意する」の両者とも「家族」と「知人・友人」が30%近くを占めている。

また、「信頼できる」人は「地域の人」と一緒



に、「注意する」人は一人で参加するという回答も多かった。娯楽活動は気のおけない間柄の人と参加する傾向が高いが、それ以外に「地域の人」との参加や「一人」での参加も次いで多いことがわかる（複数回答）。

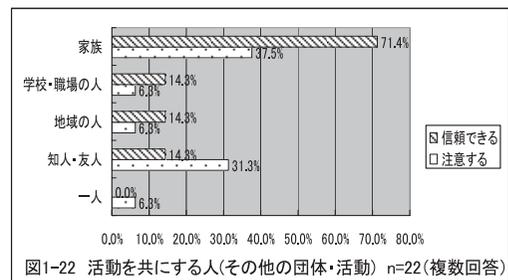
### (20) ボランティア・NPO・市民活動を共にする人



ボランティア・NPO・市民活動を行なっている人は、すべてにおいて「信頼できる」人の参加割合が高い。それらを共にする人については、「信頼できる」・「注意する」の両者とも「学校・職場の人」という回答が多かった。

また、それに次いで「地域の人」という回答が、家族や友人よりも職場や地域で関わっている人と共に参加している傾向があることがわかる（複数回答）。

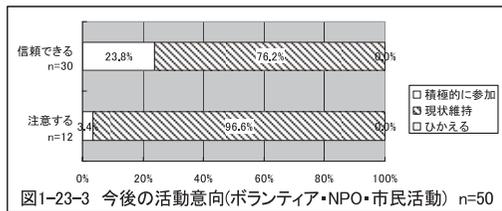
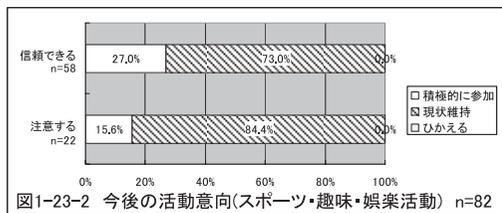
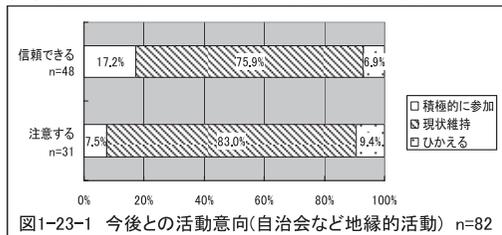
### (21) その他の団体・活動を共にする人



その他の団体・活動を共にする人については、「信頼できる」人の中では「家族」が一番多い結

果となっている。また、「信頼できる」人の「学校・職場」のや「地域の人」、「知人・友人」との参加は14.3%と同割合となっている。また、「一人」で参加すると答えた人はいなかった。それに対し、「注意する」人はやはり「家族」と回答した人が一番多かったのだが、それに次いで「知人・友人」と回答する人も多く、「信頼できる人」と「注意する人」の間で違いが目立つ（複数回答）。

(22) 現在活動している人の今後の活動意向



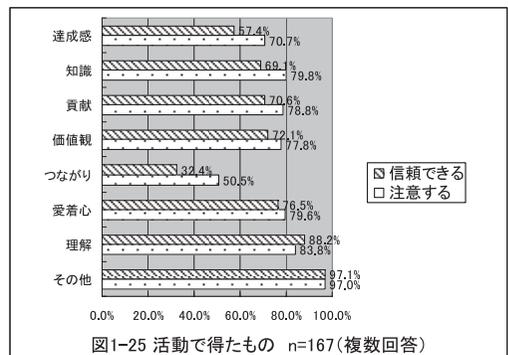
自治会などの今後の活動意向については、「信頼できる」人の方が「積極的に参加する」と回答した割合が高かった。しかし両者とも「現状維持」と回答した人が全体の4分の3以上を占め、今後も地縁的関わりを続けていこうとする意思が見られる（有意差なし）。

また、「スポーツ・趣味・娯楽活動」については、地縁的な活動と同様に「信頼できる」人の方が「積極的に参加する」という回答は多かったが、両者とも今後の活動意思は高い。また、「今後の参加をひかえる」と回答した者は両者ともいなかった。それは、スポーツや趣味など、自分にとって好きなことを行うための活動であるからであろう

か ( $\chi^2$ 値=30.36,  $p<0.01$ )。

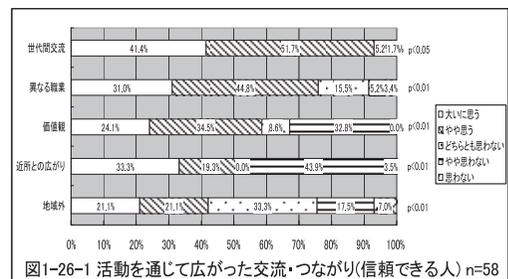
「ボランティア・NPO・市民活動」については、やはり「信頼できる」人の方が「積極的に参加する」と回答した割合は多かったが、「注意する」人は3.4%と極端に少ない結果となった。しかし、両者とも「今後の参加をひかえる」と回答した人はおらず、「現状維持」が高い割合を占めた。「注意する」人に関しては 実に96.6%であったことから、今後の活動に前向きであることがうかがえる（有意差なし）。

(24) 活動を通じて得たもの



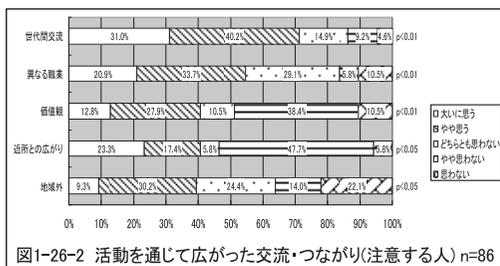
活動で得たものでは、「信頼できる」、「注意する」共に、「理解」が僅差であるものの、一番高い割合となっている。また、中でも「つながり」が一番少なくなっている。つまり、何らかの活動をした場合、様々なことへの「理解」などを得ることが出来るが、その際に人と人との「つながり」は十分には得られていないということが考えられる（複数回答）。

(25) 活動を通じて広がった交流・つながり



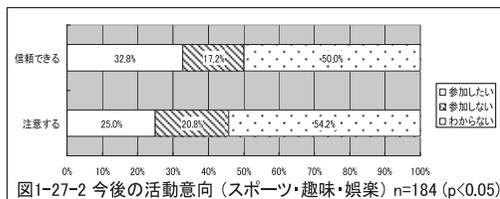
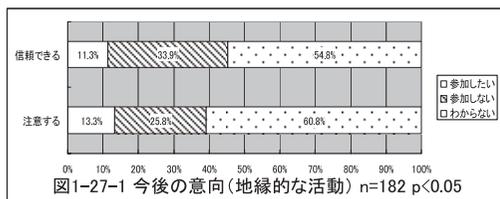
「信頼できる」人について、活動を通じて広がっ

た交流・つながりの内容を調べてみると、まずは、「世代間交流」が顕著である、「異なる職業」、「地域外」は「大いに思う」や「やや思う」などが、比較的高い傾向にある。また「価値観」は「やや思う」、「やや思わない」の二つが高い割合を占めつつも、「思わない」は全く無く絶対的には受け止められていない。そして「近所との広がり」は「大いに思う」、「やや思わない」の二つが高い割合を占めていて、「どちらとも思わない」は全く無い。

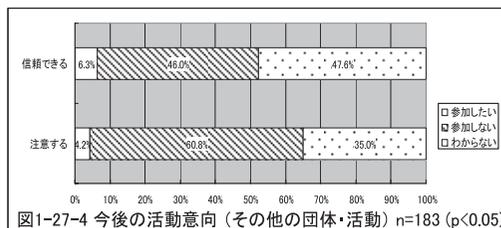
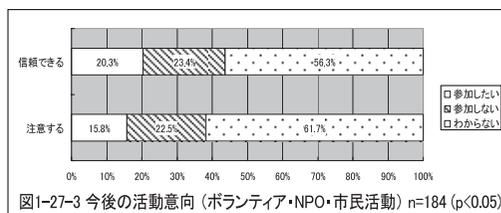


「注意する」人については、「世代間交流」、「異なる職業」については「大いに思う」、「やや思う」の二つが高い割合を占めており、逆に「価値観」、「近所との広がり」は「やや思わない」が高い割合を占めている。「大いに思う」と「やや思う」を合計すると、約4割にのぼっている。

(26) 現在活動していない人の今後の活動意向



今後の活動意向においては、現在参加していない人達にとっては、基本的には先のことは「わからない」であり、現在参加していないということは、今後も参加する予定が無いという見解が多く



見られる。しかしながら、「スポーツ・趣味・娯楽」( $\chi^2$ 値=31.63, p<0.05), 「ボランティア・NPO・市民活動」( $\chi^2$ 値=32.82, p<0.01)については、「参加したい」が「自治会などの地縁的活動」(p<0.05), 「その他の団体・活動」( $\chi^2$ 値=31.497, p<0.05)に比べて、高い傾向が見られる。

結び

前述したように、パットナムが「ソーシャル・キャピタルとは、「社会的なつながり(ネットワーク)とそこから生まれる規範・信頼」であると述べているように、今回の品川区の調査でも、人は「信頼できる」と回答した群の方が、多くのネットワークを保持していることが明らかになった。すなわち、人を「信頼できる」と回答した群の方が、同じ地域であっても、より豊かなソーシャル・キャピタルを享受していると推測できる。様々な地域活動を積極的に参加することが、地域社会的なネットワークと、その地域の人と人との連携力を強化するものと考えられる。言い換えれば、その地域のソーシャル・キャピタルが豊かになり、地域における安全、安心、信頼が育っていくと推測できる。

品川区では、ボランティア活動をするということについて「信頼する」と「注意する」群の間において、有意な差が見られたが、概して、ソーシャル・キャピタルが豊かな地域では、ボランティア活動が盛んになるという傾向がある。様々な市民活動

やボランティア活動が盛んになることは、ソーシャル・キャピタルの培養と相互関係があると考えられている。

今回の調査は、パットナムがソーシャル・キャピタルの3つの構成要素について市民の積極的な諸活動への参加・参画と、互酬性としての規範が、社会的信頼関係を招来するという相互関係に言及しているが、「信頼できる」群においては、相互協力的な結果が見られていると推測できる。また、「注意する」群においては、様々な活動への参加が「信頼できる」群と比較して、相対的にネットワークが貧しく、利己心と連帯の調和としての規範も役に立つまでにはならず、信頼関係が構築されていないと考えられる。

今後の課題は、今回と同様な調査方法によって、東京都小平市で調査を行なっているので、東京23区の一つである品川区と東京都下の小平市との調査結果を、様々な角度から比較することによって、東京都内と都下における地域的・社会的・経済的条件の差異をふまえて、人と人のネットワーク、規範、信頼関係について比較検証していくことである。

#### 【引用文献】

- 稲葉陽二 2008 ソーシャル・キャピタルの潜在力 日本評論社 p 13
- 草野篤子・瀧口眞央 2009 b 人間への信頼とソーシャル・キャピタル東京品川区における研究 白梅学園大学・短期大学教育・福祉研究センター研究年報 No.14 pp 54-62
- 内閣府国民生活局 2003 豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて
- 日本総合研究所 2008 日本のソーシャル・キャピタルと政策 ~日本総研 2007 年全国アンケート調査研究結果報告書
- ロバート・D・パットナム (河田潤一訳) 2001 哲学する民主主義 NTT 出版
- ロバート・D・パットナム (柴内康文訳) 2006 孤独なボーリング 柏書房

ルソー (小林善彦, 井上幸治訳) 2005 人間不平等起源論 社会契約論 中央公論新社 p.5

#### 【参考文献】

- 草野篤子・森山千賀子・瀧口眞央・瀧口優 2008 地域ネットワークに関する調査研究 白梅学園大学・短期大学教育・福祉研究センター研究年報 No.13 pp.46-60
- 草野篤子・瀧口眞央 2009 a 人間への信頼とソーシャル・キャピタル東京都小平市における研究 白梅学園大学・短期大学紀要 45号 pp 13-30
- 宮川公男・大守隆 2004 ソーシャル・キャピタル 現代経済社会のガバナンスの基礎 東洋経済新報社
- 内閣府経済社会総合研究所 2006 コミュニティ機能再生とソーシャル・キャピタルに関する研究調査報告書
- さいたま市政策局政策企画部コミュニティ課市民活動支援室 2007 ソーシャル・キャピタル向上に向けた基礎調査報告書
- 瀧口優・森山千賀子 2009 a 社会的ネットワークとソーシャル・キャピタル 東京都小平市における研究 白梅学園大学・短期大学紀要 45号 pp 31-48
- 瀧口優・森山千賀子 2009 b 生活への満足度と属性について 一品川区におけるソーシャル・キャピタル(2) 白梅学園大学・短期大学教育・福祉研究センター研究年報 No.14 pp 63-71